

## 県立長野図書館との交流研修について

斧 澤 有 里 (信州大学附属図書館工学部図書館)

湯 本 寛 深 (信州大学附属図書館)

### 1. はじめに

2015年8月に締結された「信州大学附属図書館と県立長野図書館の連携に関する覚書」により、県立長野図書館と信州大学附属図書館（以下、「当館」という）では様々な連携・協力事業が行われている<sup>1)</sup>。

この度はその覚書のうち「職員の研修・相互交流」に基づき、双方の職員がお互いの館で業務を体験する4日間の職員交流研修が行なわれた。

この交流研修は今回で2回目となり、初回は2016年度に実施<sup>2)3)</sup>されている。今後も隔年での継続を計画しているが、今回については双方の業務の繁忙などを考慮した結果、県立長野図書館職員の当館への受入は2019年3月と5月、当館からの派遣は2019年6月となった。

本稿ではこの研修で得られた知見について報告する。

### 2. 研修の概要

今回交流研修を受け入れていただいた県立長野図書館は、1929年に開館した県立図書館であり、1979年に現在の長野市若里に移転して現在に至る<sup>4)</sup>。2015年から「人・情報・空間」の変革を柱とする大小様々な図書館改革事業が進められており<sup>5)</sup>、研修直前の2019年4月には、前年11月より整備が進められていた「信州・学び創造ラボ」がオープンとなった<sup>6)</sup>。様々な変革が行われている中で、「空間・機能・サービスは単にトップダウンで作られたのではなく、館長のアイデアに触発されつつ、構成図書館員・住民・大学生・図書にかかわる様々な団体が討議しながら作り上げていった<sup>7)</sup>」ことが評価され、県立長野図書館は「Library of the Year 2019 優秀賞」を受賞している。

今回の研修プログラムでは、図書館の業務に加え、この変革に伴うサービスや施設の変化についても説明を受けた。さらに、図書館の設備を実際に使用して説明を受けたり意見交換を行ったほか、「信州・学び創造ラボ」の実際による活用事例を見学する時間も用意していただいた。なお、研修プログラムは表1の通りである。

表1. 県立長野図書館交流研修プログラム

時間	6月13日(木)	6月14日(金)	6月20日(木)	6月21日(金)
午前	<b>研修ミーティング</b> 職員紹介・研修内容説明  <b>県立長野図書館について</b> ・めざすこと ・取り組んできたこと ・館内見学(開架、書庫等) ・信州・学び創造ラボについて	<b>市町村図書館・公民館図書室</b> ・県内の状況説明 ・研修企画 ・前日会議ふりかえり  <b>情報リテラシープログラム体験</b> ・「図書館王にオレはなる!!」 ・学校図書館へのサポート ・子ども読書活動推進	<b>レファレンス</b> ・受付:調査:回答(処理票も) ・公開:蓄積:共有(レファ協も) ・市町村、NDL、専門機関との関係 ・事例  <b>基幹業務</b> ・書誌作成 ・新聞・雑誌総合目録 ・知のポータル・ジャパンサーチ  <b>データベース活用について意見交換</b> 「MieNa」「レール電子図書館」「ポブラディアネット」を使っていたうえで、その活用方法についてご意見をいただけたらと思います。	<b>対外業務・広報</b> ・県図書館協会公共部会、図書館大会 ・関係団体事務(全公図、関プロ、日図協) ・HP、Facebook等の広報体制、発信内容  <b>「利用者教育」に関するアイデア会議</b> これからの「利用者教育」のあり方等について相互にアイデア出しをします。
	<b>北信公共図書館連絡協議会 館長・庶務担当者会議</b>  同席していただき、県内公共図書館の現状や課題などについて、見て考える機会としていただきたいと思います。	<b>カウンター業務</b> ・一般図書室  <b>基幹業務(受入)</b> ・MARC(TRC、郷土) ・購入・寄贈 ・発注、支払、雑誌スポンサー ・装備、仕様	<b>お仕事紹介タイム</b> 研修受講者にそれぞれご担当の業務(ビブリオバトル、リポソトリ)等についてお話ししていただき、当館司書職員との交流を深めていただきます。  <b>書庫内資料の再組織化について</b> ・目的、概要 ・「検閲資料」「信濃図書館資料」等 ・PTA母親文庫資料について ・アーカイブについて	<b>「公共図書館のこれまでとこれから」</b> 当館館長の論考を事前にお読みいただき、公共図書館のこれまでとこれからについて館長と懇談する時間にしていただきます。  <b>「信州・学び創造ラボ」活用事例の見学</b>
午後				

表1の通り、リニューアルした県立長野図書館の空間に関する説明から業務説明や意見交換を含む多様なプログラムを経験させていただいた。

次章では、このプログラムの中から、特に印象に残った2点について取り上げたい。

### 3. 研修を通じて

#### 3-1. 情報リテラシープログラム：なぜ? どうして? を引き出す

1点目は、学習者支援のための情報リテラシープログラムである。このプログラムでは、主に児童サービスを中心としたリテラシープログラムと職場体験・インターンシップの受け入れプログラムについて紹介いただいた。

県立長野図書館1階の児童図書室では、2019年春より、「知る」ことの喜びに出会うためのプログラムとして、iPad用プログラミングゲーム「OSMOコーディング」、百科事典探究クイズ、コミュニケーションツールとしてのテーブルゲームの設置、体験を貸し出す外遊びグッズの貸出、という4つのサービスの提供している。研修の中で特に印象深かったのは、百科事典探究クイズである。百科事典探求クイズとは、主に小学生を対象として、学年別にクイズを用意し、子ども向

## 県立長野図書館との交流研修について

け百科事典『ポプラディア』を使って答えを調べてもらうという探究学習体験である。クイズの解答用紙には、問題の答えだけでなく、その答えが『ポプラディア』何巻の何ページにあったか、という書誌事項の記入欄も用意されており、どのようにしてその答えに辿り着いたかという調べるプロセスを意識させる工夫がされていた。

本研修では、この投稿されたクイズの解答用紙にコメントを記入し、掲示した。学校とは違う形での能動的学習を提供したいというクイズ出題の意図から、コメント作成にあたっては、単に正解・不正解を示すだけでなく、もっと知りたいを促すようなコメントをつけているとのことだった。例えば、「長野県の『県鳥』はなんですか」というクイズに「ライチョウ」と正解した解答に対して、「よくできました」で終わらず、「長野県以外にライチョウが県鳥のところは2つあります。どこかな」とさらに問いかけるのである。大学図書館でも学生の能動的な学習支援のためにいくつかの取り組みが行われているが、こうした「もっと知りたい」を促すような取り組みは、残念ながら現時点で当館では取り組まれていなかったため、この百科事典探求クイズは大変興味深かった。

また、情報リテラシープログラムに関連する、職場体験・インターンシップの受け入れのプログラムについても話を聞いた。実際に行われた中学生の職場体験プログラムを説明してもらったが、図書館の機能を知ってもらうために、受動的にこなすようなプログラムではなく、「調べる」「学ぶ」といった図書館の機能を能動的に体験するプログラムとなっており、大変参考になった。担当者の職場体験・インターンシップを通じて出会いと発見を持ち帰ってもらいたいというプログラムのコンセプトの重要性はとても共感するところであった。

当館においても毎年近隣の中学校の職場体験学習を受け入れているが、従来の職場体験学習プログラムは、大学図書館の機能を知ってもらうことと大学生の学習スタイルを感じてもらうことというところに留まっていた。今回の研修を受けて、受け入れた中学生の「なぜ」や「どうして」を促すような職場体験学習プログラムを考案したいと思い、研修後、県立長野図書館の取り組みを元に、本学中央図書館における中学生職業体験のための

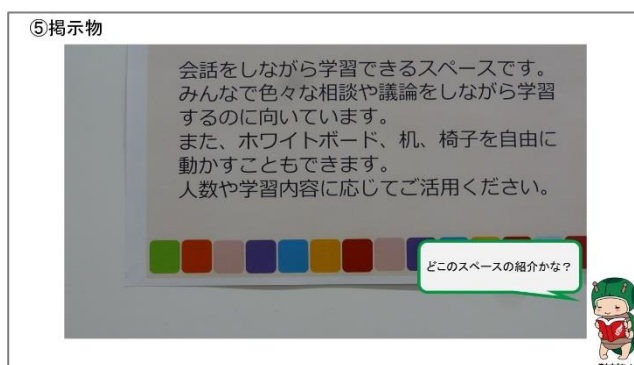


図1 館内探索プログラム資料より抜粋

館内探索プログラムを作成した。作成した館内探索プログラムは、中学生に館内の写真(図1)を渡し、館内を探索しながら、その写真が撮影された場所を探してもらうというものである。従来通り、大学図書館の機能を知ってもらうことと、大学生の学習スタイルを感じてもらうことを目的としつつも、「やらされる」のではなく、中学生自ら能動的に楽しみながら取り組んでもらえるプログラムにすることを目標とした。実際に館内探索プログラムを行った中学生からは、楽しかったという感想をもらった。自ら目的をもって館内を探索する中で発見したり感じたりした大学図書館のイメージが、彼らの中で何らかの形で残れば嬉しい限りである。

### 3-2. レファレンス研修：知の「蓄積」と「共有」

2点目に、「人」と「情報」を結ぶ図書館として大切な業務のひとつであるレファレンス研修について述べる。今回は県立長野図書館でのレファレンス業務全般について詳しく紹介いただいた。

レファレンスは利用者の問い合わせから始まる。受け取った質問に対し、県立長野図書館では「受付」→「調査」→「回答」→「公開：蓄積：共有」の流れで業務に当たる。「回答」に際しては、調査結果のみでなく経過も含めることで、次回はこれを参考に自分で調査できるような内容にすることを意識しているとのことだった。リテラシー教育に通じることであり、ここでも図書館の持つ情報と利用者を結びつけること、そして利用者の自発的な調べを促すことを目指しているのを感じた。

さらに、説明していただいた担当者から非常に強く意識付けを促されたのが最後の「公開：蓄積：共有」の部分である。受けたレファレンスに対して調査・回答することはどこの館でも行っているが、最後の「公開：蓄積：共有」となるとどうだろうか、1人の質問者に回答したその場だけで終わっているのではないかとそれはとてももったいない！と熱く説明いただいて、まさに「その場で回答して終わり」で蓄積すらしていない自身の状況を深く反省した。

公開に関して県立長野図書館では国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」を活用している。以前は、館内でエクセルファイルにデータを入力・管理していたものを3年前に全てこのデータベースに一本化したとのことだった。確かに、このデータベースに登録することでレファレンス事例を公開し蓄積し他館と共有することが全て一度に可能であるので、その他のツールで保存する必要性はない。県立長野図書館では今後、全県でデータベースへの登録を推進していきたいとのことであった。

当館も当該データベースに参加館登録はしているのだが、現在公開中の事例は1件のみである<sup>8)</sup>。当館でも改めて検討し取り組む必要があると感じた。

こうした事例の「公開：蓄積：共有」には、当然、同じような質問を抱く全国の利用者（あるいは図書館員）と必要な情報を結びつけることができるという大きな効果（間接的レファレンス支援）がある。

しかしそれ以外にも、もっと身近で切実な問題に対する効果もあると感じた。それは自館内で図書館職員のレファレンス力向上の素材とできる、という点である。

今回の研修で最も驚いたことの一つが、県立長野図書館では毎週木曜日、開館前の20分をレファレンスの館内研修にあてているということである。参加者は非常勤職員も含め、自分の担当業務との兼ね合いで参加する。約4年続けており、カウンターでのレファレンス能力の向上がみられたとのことだった。

研修の内容も多彩で工夫がこらされている。1人1つのデータベースを担当して他の人にその内容や利用法を伝えるもの、実際に過去にあった（あるいは創造した）レファレンス事例に対して実際にお互いに回答を考える実践型のもの、レファレンス資料についての実力テスト（ペーパーテスト）、レファレンス関連の内容で作られた手作りクロスワードパズル（ホームワーク型）な

どなど、作成者の培ってきたレファレンス経験と実力が惜しみなく注ぎこまれ、楽しみながら実力がつく内容である。特に経験の少ない若手職員はこうした研修を重ねることでカウンターでの対応に自信がもてるに違いない。

こうした研修を自館でも実践してみたいと思った時、自分の中にその土台ができていないことに気付いた。その原因は自分の未熟さではあるが、やはりレファレンスの結果を蓄積せずその場その場で行ってきたことも大きかったと思う。まずは、直近のレファレンス事例をまとめ、館内から共有していくことを開始したい。

#### 4. 終わりに

研修を受ける中で、「設備をつくって終わりにするのではなく、その後のあり方や運用のルールもみんなで議論しながら決めていきたい」という話が繰り返しあったことが印象的であった。県立長野図書館の3階にある「信州・学び創造ラボ」は、「共知・共創（共に知り、共に創る）」をコンセプトに掲げ、複数回にわたるワークショップを通じて空間デザインが検討されている<sup>9)</sup>。設計の段階から、県立長野図書館の職員だけでなく、関心のある「みんな」を巻き込んで図書館のあり方を考えていくという姿勢は、大学図書館にはない「公共」図書館ならではのあり方だと感じた。

その一方で、大学図書館と公共図書館という館種の違いはあれど、職員が館としての「理念」・「目標」を実現するために業務にあたるという大原則は同じである。

今回の研修では、館種や奉仕対象者の違いによる個々の業務の差異などよりも、その「理念」・「目標」、いいかえれば自館を通じて利用者にとどのような変化（利益）をもたらせるのか、という大きな思想をしっかりと具体的に職員間で共有することの大切さを強く感じた。

私たちの研修に対応してくださった職員の方々は各業務ごとに多人数に渡っていたが、そのどなたもが「県立長野図書館が目指すこと」に向けてこうした工夫をしています、という視点で説明してくださった。みなさんが「何のためにやるのか」また「自分たちの環境（人員）を活かす内容になっているか、ここだからできる・やるべきことなのか」という意識をもって業務にあたられていることが研修の4日間を通してずっと伝わってきていた。

私たちは日々の業務の中で、「(従来から) やるべき (と伝わってきた) こと」＝ルーティン業務に忙殺され、その業務の本当に意味を見失ってはいないか。あるいは、初任者等経験の浅い職員に対して、マニュアル一辺倒の作業伝達のみになっていないか。その業務を何のためにしているのかを伝える、あるいは自ら問い直すことを忙しさを理由に怠っていないか。改めて考えさせていただく大変貴重な機会となった。

当館でも報告・連絡・相談を密にできるよう定期ミーティングなどの取組みは既に行われている。その場を利用し、改めて業務の意義の伝達や見直し（再検討）などをする機会を設けていきたい。

最後に、お忙しい中のべ4日間にわたり丁寧にご対応いただいた県立長野図書館のみなさまにこの場を借りて心より感謝申し上げます。

---

#### 引用・参照文献

- 1) 森いづみ, 岩波峰子. 特集, 大学図書館と公共図書館の連携 : 拡がりゆく人材育成ネットワーク: 信州大学附属図書館と県立長野図書館の連携から. 図書館雑誌. 2018, 112(11), p. 734-736, <http://hdl.handle.net/10091/00021035>, (参照 2019-11-22).
- 2) 小澤多美子. 信州大学附属図書館における職員交流研修報告 : 公共図書館員が見た大学図書館. 信州大学附属図書館研究. 2018, 7, p. 231-236, <http://hdl.handle.net/10091/00020430>, (参照 2019-11-22).
- 3) 伊東洋輔. 県立長野図書館との交流研修. 信州大学附属図書館研究. 2018, 7, p. 237-242, <http://hdl.handle.net/10091/00020431>, (参照 2019-11-22).
- 4) 県立長野図書館. “沿革”. <http://www.library.pref.nagano.jp/information/history>, (参照 2019-11-22).
- 5) 平賀研也. 特集, 図書館と企業の連携 : 共知・共創の場としての図書館 県立長野図書館における知識情報ラボ「UCDL (ウチデル)」について. 情報の科学と技術. 2018, 68(6), p. 276-280, <https://doi.org/10.18919/jkg.68.6.276>, (参照 2019-11-22).
- 6) 県立長野図書館. “4月6日(土)「信州・学び創造ラボ」オープニングイベントのご案内”. よむナガノ県立長野図書館ブログ. 2019-03-31. [https://blog.nagano-ken.jp/library/2019/03/31/labo\\_open/](https://blog.nagano-ken.jp/library/2019/03/31/labo_open/), (参照 2019-11-22).
- 7) IRI知的資源イニシアティブ. “LoY2019 授賞理由”. 2019-10-02. <https://www.iri-net.org/loy/loy2019-second-selection-result-reason/>, (参照 2019-11-22).
- 8) “雑誌「植物地理分類研究」を発行している「植物地理分類研究会(名称は確証なし)」の事務局の連絡先が知りたい.”. レファレンス協同データベース. 国立国会図書館, 2004-03-23. [https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref\\_view&id=1000003720](https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000003720), (参照 2019-11-22).
- 9) 県立長野図書館. “「信州・学び創造ラボ」空間デザインコンセプト検討ワークショップ」を5/5(土)、5/6(日)に開催します”. 2018-04-27. [http://www.library.pref.nagano.jp/futurelibnagano\\_180505](http://www.library.pref.nagano.jp/futurelibnagano_180505), (参照 2019-11-22).